

# 悪魔の宝

豊島与志雄

青空文庫



## 一

或<sup>ある</sup>ところ、センイチといふ獵師がゐりました。たいへん上手な獵師でしたが、或<sup>ある</sup>日、どうしたとか、何の獲物もとれませんでした。鉄砲をかついで、一日山の中を歩きまはりましたが、小鳥一羽、鼠<sup>ねずみ</sup>一ぴきも、見あたりませんでした。

「へんな日だ。今日はだめかな。」

さうつぶやいて、彼は家に帰りかけて、大きな森を通りかゝりました。もう日が沈んで、あたりは薄暗くなつてゐました。

「このおれが、何一つ獲物を持たないで家に帰るなんて、今日はふしぎな日だ。」

そしてぼんやり考へこみながら、森の中を通つてゐますと、何だか、誰<sup>だれ</sup>かうしろからついて来るやうな気がしました。それで振向いてみると、ちよつとびつくりしました。柄の長い鋏<sup>くは</sup>をかついで、黒い着物をきて、大きな帽子をかぶつてる百姓らしい男が、すぐうしろについてきてゐるんです。

男はいきなり彼に話しかけました。

「お前さんは、どちらから来たんだい。」

「どつちからつて……。」「と彼はどきまぎして答へました。「わたしは猟師だ。鉄砲をかついで」いぢんぢ日歩きまはつてるので、どつちからつてことはない。」

「ふむ、それでも見たらう。」と男は言ひました。

「何を……。」

「穴を掘つてるのを。」

「穴だつて……。」

「栗くりの木の下にさ……。」

「栗の木……。」

「わたしが栗の木の下に穴を掘つてるのを、お前さんは見たらう。」

「栗の木の下に穴を掘つてる……そんなもの見やしない。」

「ほんとに見なかつたか。」

「見ないよ。だが、そんなことを聞いてどうするんだい。」

「ふむ、その調子ぢや、ほんとに見なかつたらしいな。」

男はそれきり何とも言ひませんでした。やはり彼について来ました。

変な奴だな、とセンチチは思ひました。そして大きな森の中だし、もう薄暗くなつてる

し、何だか気味が悪くて、だまつて足を早めました。が男はやはりついて来ます。その様子を、彼はときどき横目でうかがひました。柄の長い鍬くわ、黒い着物、大きな帽子、百姓のやうな様子……。

ところが、森から出て、砂利の道にさしかゝると、その男の足音が変にひゞきました。ちやうど牛か鹿しかが歩いてるやうなんです。センイチは立ちどまつて男の足をながめました。「お前さんは何をはいてるんだい。」

「あゝこの足か。」と男は答へました。「わたしの足は、一風変つてるよ。見せてあげよう。」

そして男の差出した足を見ると、二つにわれたひづめがついてゐて、牛とそつくりの足です。

センイチはびつくりしました。そしてなほよく男の様子を見ると、手の指に長い爪つめがありますし、尻しりから長い尾が下つてゐます。

「はゝあ、気がついたな。」と男は言ひました。「もつとふしぎなものを見せてあげよう。」

そして帽子をぬぐと、頭に二本の角がはえてゐました。

二本の角、長い爪<sup>つめ</sup>、長い尾、二つにわれたひづめ……。セインチはいきなり鉄砲をさしつけました。

「悪魔……。お前は悪魔だな。何しに出て来たんだ。引込め<sup>ひっこ</sup>。打殺すぞ。」

「おつと、待つてくれ。まあ待つてくれ。」と悪魔は言ひました。「鉄砲なんか打つたつて、おれにはあたりはしないが、とにかく、そんなものはけんのんだ。」

「何しにおれの前に出て来たんだ。」とセインチはなほ鉄砲をさしつけながら言ひました。「いや実はね、おれが穴を掘つてるところを見られやしなかつたかと思つて、ちよつと聞いてみただけさ。それだけのことだが、お前の様子を見ると、今日は一ぴきも獲物がなくて、ひどくしよげてるやうだね。どうだ、さうだらう。」

そして悪魔はセインチの顔をじつと見ました。

「そこで、さきほど、ちよつと思ひついたことなんだが、おれの道具をお前に貸してやらうぢやないか。第一、この足はどんな山坂でも藪<sup>やぶ</sup>の中でも、自由に駆けまはることが出来る。この手の爪<sup>つめ</sup>は、どんな木でも崖<sup>がけ</sup>でも、自由によちのぼることが出来る。それから、この角をもつてゐると、どんな猛獣も毒蛇<sup>どくしや</sup>もこはがつて、決して近づかない。それから、このしつぽは、これは魔法のしつぽで、おれにはごく大切なものだが、お前が使ふとした

ら、遠くの獲物をまねき寄せることが出来る。どうだ、それをみな、お前に貸してやらうぢやないか。思ひ通りに獲物がとれるよ。」

セインチは考へこみました。悪魔はなほ言ひつゞけました。

「もつとも、おれがこんなことを言ひ出したのが、お前は腑ぶにおちないんだらう。なにそれには、おれの方にだつて、ちよつと考へがあるんだ。おれは、もうしばらく都に出たことがないので、近日行つてみようと思つてる。ところが、こんなものを身につけると、いくらうまく人間に化けたつもりでも、うっかりした拍子に、いつ見あらはされなくてもかぎらない。そこで、都に行く間、お前に貸してやらうといふんだ。それも、お前が借りたくなければ、無理にはすゝめない。実はおれの方はどうだつていゝんだ。お前が一日いちにち 獵に出て、手ぶらで帰るのを見て、少し気の毒になつたから、貸してやらうと思つたんだが、どうともお前の心まかせだ。だがこれがあれば、十分いゝ獵が出来るがね……。」

「そして、どれくらゐの間貸してくれるんだい。」とセインチはたづねました。

「あまり長くは貸せないね。おれが都に行つてる間だけだ。都から帰つてくれば、すぐお前の家うちに行くから、返してもらはう。」

「よし、それぢや借りよう。」とセインチは決心して答へました。

「さうさ、たゞで貸さうといふんだからね。借りるのがあたりまへさ。だが、たゞ一つことわつておくがね、森の中におれが掘つた穴をさがさうなどと、ばかな気を起しちやいけないよ。そんなことをしたら、もう約束はとりけしだから、よくおぼえておくがいゝ。」

それをセンイチは承知して、悪魔から角と爪つめとひづめと尾とを借りることにしました。悪魔が尾でセンイチの身体からだをなでると、すぐに、センイチは悪魔の姿になり、悪魔はセンイチと同じやうに人間の姿になりました。

悪魔はセンイチの姿と自分の姿とを見くらべて、満足さうに言ひました。

「ほゝう、よく似合ふよ。おれの方もよく似合ふだらう。ぢや、さやうなら。おれが都に行つてる間に、思ふ存分獵をして、たくさん、金をまうけておくがいゝよ。」

センイチがあつけにとられて、ぼんやりしてるうちに、悪魔は森の中の暗がりにかくれてしまひました。

## 二

悪魔の姿を借りたセンイチは、明日から十分獵が出来ると思つて、急いで家うちへ歸つていきました。

小さな村の出はづれにあるセンイチの家には、お上かみさんのセイが一人で、もう夕食の仕度をしてしまつて、センイチが帰るのを待ちながら、縫ぬい物ものをしてゐました。ところが、表いさほひから勢いきほひよくはひつてきたセンイチの姿を見ると、彼女はあつと声を立てました。

「お前だれさんは誰だれだい。」

「何を言つてるんだ。」とセンイチは笑ひながら答へました。「おれぢやないか。」

「誰だれだい。」とセイはくり返しました。

「おれだよ。センイチだよ。何をとぼけてるんだ。」

「センイチだつて……あゝ、二本の角、手の爪つめ、足のひづめ、それからしつぽ……。悪魔だ、お前は悪魔だ。出て行け。」

「あはゝゝ……。」とセンイチはなほ笑ひました。「これはおれが悪かつた。おもしろい話があるんだ。まあ聞けよ。」

センイチは家うちに上あがりこんで、まだびく／＼してるセイに、森の中のこと、悪魔の姿を借りたことを、くはしく話してきかせました。

その話をきゝながらセイは、彼の顔をつく／＼ながめてゐました。

「さう言へば、顔は全くお前まづさんだ。だけど、わたしはまだ安心が出来ないから、真まづばだ

裸かになつてごらん。」

セインチは裸になつてみせました。

「なるほど、身体からだに毛が一ぱい生えてゐないところをみると、悪魔ぢやなくて、やつぱりお前さんだね。」

「何を言つてるんだ。本当に悪魔になつてたまるものか。」

セインチはまた着物をきて、長い爪つめのある手で、煙草たばこを吸ひはじめました。

「おれはたゞ、この爪つめとひづめとしつぽとを悪魔から借りただけだ。もう安心していゝだらう。」

セイはやうやく安心して、めづらしさうに彼の角や爪つめや尾やひづめにさはつてみました。

セインチも、自分の身体からだをふしぎさうにながめました。

「わたしは、悪魔のこんなものにさはるのは、はじめだよ。」とセイは言ひました。

「おれだつてはじめてさ。」とセインチは言ひました。「さはつただけぢやない、自分の身体からだにくつつけてるんだから、変な氣持がするよ。だが、これで思ひ通り獵あしたが出来るんだから明日あしたが待ち遠しいな。」

そして二人は、悪魔のそれらの道具をいぢりまはしたり、じょうだんを言つたりして、

楽しく食事をしました。

三

翌日あくるひになると、センイチは朝早くから鉄砲をかついで猟に出かけました。

悪魔が言ったことは本当でした。センイチはそのひづめの足で、どんな藪やぶでも山坂でも、自由に駆けまはられましたし、長い爪つめの手で、どんな崖がけでも木でも、自由によちのぼれました。そして遠くに獲物がゐますと、こちらから近寄つて行かないでも、尾でそれをまねき寄せて、鉄砲でねらひ打ちにすることが出来ました。その上、頭の二本の角をふり立てゝゐますと、どんな猛獣も毒どくじや蛇も恐れて逃げますので、少しも危あぶないことがありませんでした。そして猟をすると、雉きしや鳩はとや山やまどり鶏うさぎや兎うさぎや穴あな熊くまなど、面白いほどとれましたし、ときには、大きな鹿しかや猪いのししなどもとれました。

「どうだ、すてきだらう。」とセンイチは言ひました。

「たいへんな獲物ね。」とセイは言ひました。

ところが、一つ不便なことには、センイチは悪魔の姿をしてるものですから、人中に出るのもとより、人に会ふのさへ避けなければなりませんでした。朝早く出かけて、山の

中にはいるまでは、大きな帽子で角をかくし、大きな手袋で爪をかくし、大きな足袋でひづめをかくし、大きなズボンで尾をかくしました。獲物は昼間藪の中にかくしておいて、夜になつて取りに行きました。そして翌日になつて、セイがそれを車につんで、二里ばかり向うの町へ売りに行きました。センイチが家にゐるとき、人がたづねてくると、彼は急いで押入の中にかくれて、セイだけが会ひました。

さういふ日が、幾日も、幾日も、つづきました。はじめのうち、センイチは獲物のとれる面白さに、夢中になつて猟をしましたし、セイはお金のたまる面白さに、夢中になつて町へ獲物を売りに行きましたが、そのうちに二人とも、そんなことに、くたびれてあきてきました。たくさんたまつてゐるお金を見ながら、二人は、ためいきをつくやうになりました。

その上、いろんな噂がたつてゐました。センイチのお上さんが、毎日あんなにたくさん鳥や獣を持つてくるのが変だと、町の人々は話し合ひました。センイチが悪魔のやうな姿をして、山の中を駆けまはつてゐると、ある猟師が話しました。センイチ夫婦は悪魔に食はれてしまつて、その後、悪魔が二人に化けて住んでゐるのだと、ある人たちは言ひました。そしてとき／＼、家の中の様子をそつとのぞきに來るものさへありました。

「あゝ、悪魔が早くかへつて来ないかなあ。」とセンイチは何度もくり返しました。

「都に行つてくる間なんていはないで、十日とか二十日とか、日をきめて約束すればよかつたのに。」とセイは言ひました。

「だが今さらもう仕方がない。悪魔がまだなか／＼歸つて来ないやうだつたら、どうしたらいゝかしら。」

「ほんとに困つたね、お金ばかりたまつてさ。」

四五十日もたつと、二人はもう待ちきれなくなりました。そして幾日も考へたすゑ、センイチはふとよいことを考へ出しました。悪魔が森の中に掘つた穴をさがし出せば、約束は取消しだといふことでした。もう悪魔の道具なんかこり／＼でした。約束が取消しになつて、元の身体からだにさへなれば、お金はたくさんたまつてゐるし、望むところでした。それに、悪魔はきつと穴の中に宝をうづめてるにちがひありません。それが手にはいるかも知れません。

「さうだ、それにかぎるよ。」とセイは賛成しました。「どうして、もつと早く思ひつかなかつたんだらう。すぐに明日あしたからはじめなさいよ。」

「うむ、さうしよう。」

そしてその翌日から、センイチは狩をやめて、森の中に悪魔の穴をさがしに出かけました。大きな帽子をかぶつて、鋏くはをかついで、あのとときの悪魔の姿と同じ姿でした。けれども、たいへん大きな森ですし、たゞ栗くりの木の下といふだけで、いくつもある栗の木のどれだか分かりません。もう、あれから五十日もたつてることですし、センイチは一日いちんち、森の中をうろつきまはつても、悪魔の穴を見つけることが出来ませんでした。

センイチが帰つてくると、セイはたづねました。

「分つたの。」

「いや分らない。大きな森の中だ。一日いちんちぢやだめだ。」

翌日もセンイチは出かけました。

「分つたの。」とセイはたづねました。

「分らない。」とセンイチは答へました。

三日目も同様でした。

「分つたの。」

「分らない。」

四日目も同じことでした。

「まだ分らないの。」とセイはたづねました。

「まだ分らない。」とセンイチは答へました。

五日目も同じでした。

「まだ分らないの。」

「まだ分らない。」

六日目も同じでした。

「まだ分らないの。」

「まだ分らない。」

「もうやめた方がいゝよ。」とセイは言ひました。

「いや、も一日いちんちさがしてみよう。」とセンイチは答へました。

#### 四

七日目になつて、センイチは今日を最後といふ決心で出かけました。そして森の一番奥  
 深いところへ、むちやくちやに進んでいきました。ひづめの足でしたから、どんな藪やぶでも  
 つきぬけられました。すると、茨いばらや蔦つたが、大木にからみあつてる茂みの先に、少し打うち開ひら

ける場所に出ました。そこにたいへん大きな栗くりの木が一本あつて、その枯れた下枝に、小さな蝙蝠かうもりが一匹とまつてゐました。蝙蝠はセンイチを見ても、逃げようとしませんでした。

いやな奴だな、とセンイチは思ひました。が、ふと気をかへて、話しかけてみました。

「おい、蝙蝠、お前は悪魔と仲よしだから、知つてるだらう。悪魔がどこに宝をかくしてるか、それをおれに教へてくれないか。」

蝙蝠は返事どころか、身動き一つしませんでした。

センイチはおこつて、石を一つ拾ひ上げました。そしてそれを投げつけるつもりで見ますと、もう蝙蝠は消えうせてしまつてゐます。

おや、とセンイチは思ひました。が、こんな変な蝙蝠があると、悪魔が宝をかくしたのは、この栗の木の根本にちがひない、と考へました。そして注意して、栗の木の根本をしらべてみますと、はたして一ヶ所、少し土が小高くなつてるところがありました。

「これだな。」とセンイチは叫びました。

彼は力をこめて、一ひとくは鍬くわぎくりと掘りました。何も出てきません。も一つぎくりと掘り

ました。まだ何も出て来ません。けれども彼は一生懸命でした。あぶら汗を流しながら、四五尺も土を掘りました。すると、かちとくは鋤にあたつたものがあります。それに力を得て掘つてみると、小さな木の箱が出て来ました。

彼はほつと息をつきました。それからうれしくなつて、いきなり箱を打破つてみました。ところが、どうしたことせう、さびくちた鉄やブリキのきれ、よごれた紙くづ、きたない陶器のかげら、そんなものばかりで、外には何もありませんでした。

センイチはぼんやりしてしまひました。それからいまくしげに箱を蹴散けちらしましたが、とたんに、声を立てました。

「あいた。」

足のうらをひどく箱にぶつつけたのです。けがでもしないかと思つて、足を見ますと、もうひづめもなにもなくて、元どほりの人間の足になつてゐました。

彼は驚いて、声も出ませんでした。急いで手を見ますと、長い爪つめがなくなつてゐます。

その手でなでてみますと、長い尾もなくなり、頭の二本の角もなくなつてゐます。全く元どほりの人間になつてゐるのでした。

さうなると、もう悪魔の宝なんかはどうでもよく、元の人間の姿になつたのがうれしく

て、<sup>くは</sup>鍬や帽子も打捨て、帰りかけました。ところが、元の人間になつたために、森の中のしげみをつき切るのがたいへんでした。やつとのことで家に帰りついたときは、もう薄暗くなつてゐました。

彼の姿を見ると、セイは駆け寄つてきました。

「まあ、お前さん、昔のとほりのお前さんだ。」

二人は手をとつてよろこびました。

セイイチは悪魔の宝のことを話しました。

「悪魔の宝つて、おほかたそんなものだらうよ。」とセイは言ひました。「だけどおかげで、わたしたちは、たくさんお金まうけが出来た。いくらあるか数へてみよう。」

二人は押入<sup>おし入れ</sup>から金箱を取出しました。そして開けてみると、びつくりしました。たしかにお金がたくさんはいつてゐたはずなのが、鉄のきれや紙くづや陶器のかけらばかりで、悪魔の宝と同じものでした。

二人はほかんとして顔を見合せました。

「今晚は。」

いきなり声がしましたので、またびつくりして、振向くと、いつの間にはいつて来たか、

そこに悪魔が、悪魔どほりの姿でつゝ立つて、笑つてゐます。

二人は返事も出来ませんでした。

悪魔は急に真面目な顔をして言ひました。

「おれの見そこなひだつた。お前は正直ものだとばかりと思つて、あんな約束をしたんだが、お前が約束を破つたので、急に都から帰つてきた。だが、都もあまり面白くないや。実は少しあきはじめてたから、ちやうどよかつたかも知れない。お前の方でも、もう獺や金まうけにもあきたらう。それで、もとくどほり、約束は取消しだ。金ががらくたになつたからつて、お前の方から約束を破つたんだから、うらむところはないだらう。まあ夢をみたやうなものさ。でも面白い夢だつたらう。そこで、うらみつこなしに、仲よく別れようよ。さよならだ。」

悪魔が差出した手を、センイチはぼんやり握りしめました。

「さやうなら。」

もう一度さう言ふ声のひゞきだけで、もう悪魔の姿は消えてしまつてゐました。

「まあ、をかしの悪魔だ。」とセイがしばらくして言ひました。

その声で、センイチは我にかへつて、角のなくなつた頭や、尾のなくなつた尻しりや、爪つめの

なくなつた手や、ひづめのなくなつた足など、元どほりの身体からだを、なでたりながめたりしました。それから立上つて伸びをしました。

「あゝ、これでさつぱりした。悪魔と約束なんかするものぢやない。明日からもと／＼どほりに働くんだ。そこで……久しぶりに村の方に行つてみようか。もう長い間、おれは誰だれにも会はないんだから……。」

「さう、わたしも一しよに行かう。変なうはさがたつてるんだから、村中を歩きまはつてやろうよ。」

二人は、はじめてはれ／＼とした気持になつて、灯ひのあかるい村の店屋の方へ、元氣よく出かけて行きました。

# 青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一六巻」ほるぷ出版

1977（昭和52）年11月20日初刷発行

底本の親本：「エミリアンの旅」春陽堂

1933（昭和8）年1月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1929（昭和4）年1月

入力：菅野朋子

校正：門田裕志

2012年4月15日作成

2012年12月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 悪魔の宝

豊島与志雄

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>